

艶
言
葉

千 5

3760



45
3760

元

45

1003

2

分

割

月 子 5
3760
巻

至
信

皇
朝
御
筆
印

序

徳 義 御 萬 業 事 後 不 初
月 出 友 神 春 四 方 事 事 ども
書 あり 川 氏 画 圖
く 是 之 勢 云 々 勢 勢 永 日 の
一 爰 亦 無 亦 亦 亦

寛政三の白雲書

作者白雲

皇
朝
御
筆
印



書物とゆくと門
 といひ昔百瀬園も
 表と我必へまじり
 そのどふけい
 うぢのまじり
 菟道皇子大いなり
 地をそげ足きて
 ちまろるゆふ
 名なり
 いひ侍とらひ
 佐とらふ
 ゆふれとる
 といふ義めて
 書物とあまや
 といふと

巻ノ一



神代直指抄
 小見くさり
 又一洗り書あは
 百の理ゆひゆり
 かくみといふて
 累せりと又巻額を
 いふ人多れ足あそとる
 文字とゆりしゆ人あそといふも
 いひ侍りあそい文の字乃
 書と用ひくわ別とせるそと
 蝶の字音成せと州むると
 同くともあてむとみやみあおせ
 すのゆ人をあそ



鬢かみ鬢かみ曾ぞう也や以も小こ瓶びん
 山さん古このの詩しにに五ご字じ彙ゑ
 毎まい七しち鬢かみ鬢かみ身み
 鬢かみ乃のみみ酒しゆ
 子このの利り也や
 又また



女おんなのの鬢かみののめめぞぞここううん
 赤あかとと洗せんむむぐぐるるああを
 濡ぬれれはは鬢かみかかししらら乃の
 髪かみををここののみみぐぐ
 おおううてて洗せん
 けけりり
 髪かみ乃の
 乱らんるるはは
 髪かみををここののみみぐぐ
 子このの利り也や
 又また

髪上ノ
 四

琴のいまだてはな乃
 越名あてあえいの
 中畧あう終はこせ
 忍のこと琵琶はこと
 筆のこころあはるい
 中まじりてあはる
 あまのこころせむい
 筑紫ごころ
 気筆のこころ
 三味線も
 みずのこころ
 三弦琴といふ
 糸紙かけりの紙
 終光の柱といふ



祝上ノ五

琵琶あては
 柱のぬ
 新終
 あては
 流る水
 三弦のハ
 ああ
 くれく
 ぬ
 ぬ





女乃性かあろきる
 ちのにて親まをど
 妻をすりせれま
 とれよ慰母のまどう
 かりしをを境い
 人ふえむさう海
 多し一人も
 遊つらるとれば
 不遊言つこのまひ
 一をりやどると
 以上河原人乃
 いことばめし海
 海んとすりせれり
 海の面ひらりさう
 うけてあまとい

祝上ノ六



三海すりせれハ
 中そ波風乃
 多る屋路
 せむるとい
 年き老の海
 おびぬれま
 の推波也
 朝古作
 衣笠門太屋の
 山の浮ふせり
 せぬ東い
 家の浦り
 何せん
 ちうらせ
 いげら
 島人



琴乃
 喜紙
 人志
 今世
 立ちあ
 然
 毎門
 屋丸



古今集
 新
 己がらうとくわくわく
 ちやうどなわのちやうり
 酒どつとまきことまろ
 知事とつとま
 列子とつとま
 かから子朝伯牙
 の板車より
 んど酒つとま
 呂氏春秋も
 けつとま

七ノ上



おとこも女も世の中
 一生に終るこゝろ
 一しをいぢりて
 その身くろ作業
 ゆづらんあく勤
 こゝろた作せ
 や書めも民生
 在勤勤則不墮とあり
 かのころは
 ぢりて
 かせぐに進身
 貧乏をいしと
 世はふいひ物へあり

おもひ何事かめでと
 始御伊し痛ま志まげりて
 ありがされりのありそを先
 のるい大事にてしあども
 澄みればかこころこころより
 仕換すりこありまこ人
 あども初のはらひよう
 つりゆれども治身くく
 手もあはれどもそをこれれ
 ちがし世集て主人
 兄をさうし
 毎先し
 おけ 借ふ今集た
 といひあしはせり
 源氏東屋巻一も



祝上九上

今まのうはわかし
 しまりり空けり
 女子の嫁入
 ちこる時もあれり
 おまののちく
 中まそまき
 うやまわしそま
 のこくにする時
 珍り朽せぬを利
 親花しつ書あそ
 官ハ官成し
 急らとりつとま
 赤のこころ
 赤利



世の中は何れもゆつた
 いふに及ぶん事云お夕の
 世帯ゆつたれても中も
 んふかけさるるもの何れも
 切あつたさしこころふ
 かけて苦勞すること
 骨とおとすこと
 左様といふ書ふ出る
 詞なり又後漢書に
 霍香氏の乳飲
 悔て骨とめるとあり
 これハ後悔すること
 いふことなりや



石上ノ十二



